

⑫ 『明けの明星』

いつ果てるとも分からない別れのざわめきに、傘狂がたまりかねて声をあげた。

「皆さん、菊車殿は明日朝が早い。名残は尽きないでしょうが、少し休ませなくてはなりません。そろそろお開きとさせていただきますよう」

傘狂の声に促されてしぶしぶ皆が引き上げたのは、四ツ半をとつくに回っていた。最後までぐずぐずと帰り渋ったのはおとよだった。

いつまでもミチの袖口を掴んだまま離そうとしない。

「本当に帰って来てくださいよ。本当に、本当に」と先ほどから同じことを何度も何度も繰り返している。その度にミチも「はい、かならず」と同じ答えを返した。

翌朝、明けの明星に送られて街道に差し掛かったミチは、背後から「菊車殿」と呼ばれる声に振り向いた。

やつと空には赤みがさして来たが、まだ街道の両側の木々は黒々とした影の盛り上がり過ぎなかった。

目をこらすとその黒い塊の中から確かに人影が近づいて来るのが見えた。

薄明りの中に姿を表したのは超石だった。美濃での初めての句会で、ミチのことを「長門なる菊車が顔は鬼瓦」といじ

めにかかった老俳諧師だった。

ミチは意外なものを見るような顔で超石を見た。

「脅かしましたかな。傘狂先生のお宅に行つたところ、もう出立したと云うので急いで追いかけて来ました」そう言いながら懐から懐紙に包んだものを取り出すとミチの手に握らせた。

「ゆうべ渡せばよかつたが、なにしろ大勢で。」

「あんたが一人旅に出ると聞いて、私は何度も傘狂先生に止めてくれと頼んだ。だが、私にも止められん、と言われるので仕方が無い、諦めたけど、本当は行って欲しくない。先生が止められんものを私が止めることなど出来るはずもないので、せめて路銀の足しにでも使ってもらえれば嬉しい。」

ミチの手を両の手で包むように握って更に続けた。

「長門から物好きな浮かれ者が来たと思つてちよつとからかつてみたが、あの時は、からかいにかかつた私の完璧な負けじゃつた。それで、いっぺんにあんたが気に入った。ちようど私の娘と言つてもいい年恰好なので、一人旅に出ると聞いた時には、そりやあびつくりした。何としてでも止めてほしかつたが、止むを得ん。」

「江戸に行くと聞きました。江戸から長門に帰る途中、尾張の七里の渡しを渡ったら東海道をはずれ、揖斐川に沿って北上すれば美濃はすぐです。いいですか、帰りには必ず寄つて元気な顔を見せて下さいよ。約束ですぞ」

言っている超石の目がうるんでいる。

ミチは思いもかけなかった超石の言葉に、返す言葉を失っていた。

あの句会でのミチは無我夢中だった。試問を受けているように、何とか持ちこたえなければという気持ちだけで末席に座っていた。

超石のいじりをかわし満座の笑いを貰った時には、ただ、これで良かったのだろうか、と思っただけだった。

明けきらない幽かな明かるみの中で超石の顔を見ながら、十日ほど前に届いていた父由永の手紙を思い出した。

「余がよわい耳順に及びぬれば、早くも巡りて帰るべし、帰らぬ程は年賀をもすまじ」

私も還暦になるので、速やかに目的地を巡って帰ること、帰らない間は正月の祝いもしないつもりだ、と書いてあった。

そうか、父は耳順が近いのだ。そう思っただけの超石を見ると、父親とほぼ同年輩らしい。

少し背を曲げて立っている姿は、いじわるを仕掛けた俳諧師と言うよりも、何処にも居そうな一人の老人の姿だった。

その超石が、まるで父親のようにミチを氣遣っていたのだ。まったく予期しない優しさを貰ったミチの心は温かかった。

半町ほど歩いて振り返ると、うつすらと物の形が見え始めた街道の真ん中に、人影が一つ身じろぎもせず立っていた。

その影の遙かむこうには、明けの明星だけがただ一つ、まだしっかりと光をとどめて、朱色に輝き始めた空からミチを見送っていた。